

大会企画

📅 2021年11月19日(金) 14:10～16:10 📍 A会場 (4号館1階白鳥ホール)

大会企画2

これからの多職種連携とは

オーガナイザー：折井 孝男（NTT東日本関東病院薬剤部）

座長：宇都 由美子（鹿児島大学病院）、折井 孝男（NTT東日本関東病院薬剤部）

[2-A-3] これからの多職種連携とは？

*折井 孝男¹ (1. NTT東日本関東病院薬剤部)

キーワード：multidisciplinary、collaboration、IT

大会長 白鳥義宗先生からのミッションである。

「なぜ多職種が連携しないとならないのか？単に大勢集まれば良いのか？何が良いことがあるのか？医療は医者のためにあるのではない。医師はコーディネータであり、リーダーであらねばならないのか？いや、違うのか？それぞれの人の役割を果たすためには、ITは？システムは？どうサポートすべきか？例えば、薬剤師と他職種との間の連携では、必要十分な情報が常に得られる状況なのか？看護師は部門システム毎ではなく、横断的に仕事をする必要があるが、その連携は十分なのか？など。多職種の中心に患者はいるか？患者も参加する（患者目線の）これからの多職種連携の姿とは？」

大会長の熱意が込められている。確かにITの利活用は我々に業務の効率を高めるだけでなく、精度を上げている。このことは連携をより強めることになっているか。ネットワークの必要性も伺える。しかし、連携は病院に限らず地域を含め、自分の領域（部門・部署）だけのタテ組織の中だけでなく、組織全体（他診療科等）のヨコ組織の中での連携が大切である。いかに、どれほど連携が図れているか……。医療における様々な情報をいかに必要としているヒトに正しく、早く繋いでいくことができるか、他職種間の連携のためには多くある情報からミニマムな情報として患者につなぐことなど、これからの他職種連携について議論できればと考える。

これからの多職種連携

折井 孝男^{*1}、宇都 由美子^{*2}、

^{*1} NTT 東日本関東病院、^{*2} 鹿児島大学医学部附属病院、

How multidisciplinary collaboration could be in the future?

Takao Orii^{*1}, Yumiko Uto^{*2}

^{*1} NTT Medical Center Tokyo, ^{*2} Kagoshima University Hospital

"Why do different professional backgrounds and skills have to work together? Does it only mean that many professionals get together? What benefits does it provide? How should IT support each person's role? What is the future of multidisciplinary collaboration involving also patients (from patient perspectives)?" As a program theme of this meeting, we would like to hear the opinions of the symposiasts about these topics, and also advance the discussion to future interprofessional collaboration.

Keywords: multidisciplinary, collaboration, IT

1. 緒論

厚生労働省は、医療の質や安全性の向上及び高度化・複雑化に伴う業務の増大に対応するため、多種多様なスタッフが各々の高い専門性を前提とし、目的と情報を共有し、業務を分担するとともに、お互いに連携・補完し合い、患者の状況に的確に対応した医療を提供する「チーム医療」を推進している。

2. チーム医療(多職種連携)

厚生労働省は平成 21 年 8 月に「チーム医療を推進するため、日本の実情に即した医師と看護師等との協働・連携の在り方等について検討を行う」ことを目的に発足したチーム医療の推進について記述がある(チーム医療の推進に関する検討会 報告書 平成 22 年 3 月 19 日)¹⁾。

「チーム医療の推進に関する検討会」報告書には、チーム医療に関する基本的な考え方が示されている。以下に引用する。

○ チーム医療とは、「医療に従事する多種多様な医療スタッフが、各々の高い専門性を前提に、目的と情報を共有し、業務を分担しつつも互いに連携・補完し合い、患者の状況に的確に対応した医療を提供すること」と一般的に理解されている。

○ 質が高く、安心・安全な医療を求める患者・家族の声が高まる一方で、医療の高度化・複雑化に伴う業務の増大により医療現場の疲弊が指摘されるなど、医療の在り方が根本的に問われる今日、「チーム医療」は、我が国の医療の在り方を変え得るキーワードとして注目を集めている。

○ また、各医療スタッフの知識・技術の高度化への取組や、ガイドライン・プロトコル等を活用した治療の標準化の浸透などが、チーム医療を進める上での基盤となり、様々な医療現場でチーム医療の実践が始まっている。

○ 患者・家族とともにより質の高い医療を実現するためには、1人1人の医療スタッフの専門性を高め、その専門性に委ねつつも、これをチーム医療を通して再統合していく、といった発想の転換が必要である。

○ チーム医療がもたらす具体的な効果としては、①疾病の早期発見・回復促進・重症化予防など医療・生活の質の向上、

②医療の効率性の向上による医療従事者の負担の軽減、③医療の標準化・組織化を通じた医療安全の向上、等が期待される。

○ 今後、チーム医療を推進するためには、①各医療スタッフの専門性の向上、②各医療スタッフの役割の拡大、③医療スタッフ間の連携・補完の推進、といった方向を基本として、関係者がそれぞれの立場で様々な取組を進め、これを全国に普及させていく必要がある。

○ なお、チーム医療を進めた結果、一部の医療スタッフに負担が集中したり、安全性が損なわれたりすることのないよう注意が必要である。また、我が国の医療の在り方を変えていくためには、医療現場におけるチーム医療の推進のほか、医療機関間の役割分担・連携の推進、必要な医療スタッフの確保、いわゆる総合医を含む専門医制度の確立、さらには医療と介護の連携等といった方向での努力をあわせて重ねていくことが不可欠である。

また、日本看護協会では多職種連携と倫理について、社会的背景としてホームページに倫理的課題の概要として記述がある²⁾。その内容は以下のページである。近年、看護職を取り巻く環境において、医療の高度化・複雑化、さらには地域包括ケアシステムの構築といった変化が起きており、保健医療福祉サービスに関わる様々な職種と協働する機会が増えている。

倫理的課題の特徴として、保健医療福祉サービスに関わる専門職は、保健・医療・福祉サービスの受け手である人々のために最善を尽くすことを共通の価値として行動するが、それぞれの専門性によって、問題の捉え方や判断の内容と根拠は異なることが多い。多職種によるチームでサービスを提供する際には、それぞれの専門職の持つ価値観に相違が見られることも多く、倫理的課題に対する解決策を検討する場合であっても、ときに職種間での対立が起こる例もある。多職種がチームとして倫理的課題に向き合う際には、患者又は利用者等、もしくはその家族に対する目標のためにそれぞれの専門性を発揮することが重要であり、その立場は対等である。しかし、対立を避けたいという思いや相手の立場への配慮や遠慮から、発言や提案をあきらめてしまうことも少なくない。

3. 何故、多職種連携

「チーム医療」「多職種連携」^{1, 2)}が求められているものの、「なぜ多職種が連携しないとならないのか？単に大勢集まれば良いのか？何が良いことがあるのか？医療は医者のためにあるのではない。医師はコーディネータであり、リーダーであらねばならないのか？いや、違うのか？それぞれの人の役割を果たすためには、IT は？システムは？どうサポートすべきか？例えば、薬剤師と他職種との間の連携では、必要十分な情報が常に得られる状況なのか？看護師は部門システム毎ではなく、横断的に仕事をする必要があるが、その連携は十分なのか？など。多職種の中心に患者はいるか？患者も参加する(患者目線の)これからの多職種連携の姿とは？」本大会企画では基調講演を坂本すが先生(東京医療保健大学)にお願ひし、広い視野から多職種連携についてお話頂く。シンポジストには医師、医学ジャーナリスト、公衆衛生学・健康科学、看護部長の先生方から、各々のお立場でのご意見を頂き、本大会企画のテーマである「これからの多職種連携」について医療情報学の視点を踏まえ討議を進めたい。

4. おわりに

本大会企画のテーマである「これからの多職種連携とは」には大会長の熱意が込められている。確かに IT の利活用は我々に業務の効率を高めるだけでなく、精度を上げている。しかし、このことは連携をより強めることになっているのか。ネットワークの必要性も伺える。しかし、連携は病院に限らず地域を含め、自分の領域(部門・部署)だけのタテ組織の中だけでなく、組織全体(他診療科等)のヨコ組織の中での連携が大切である。いかに、どれほど連携が図れているか……。医療における様々な情報をいかに必要としているヒトに正しく、早く繋いでいくことができるか、他職種間の連携のためには多くある情報からミニマムな情報として患者につなぐことなど、これからの他職種連携について議論できればと考へる。

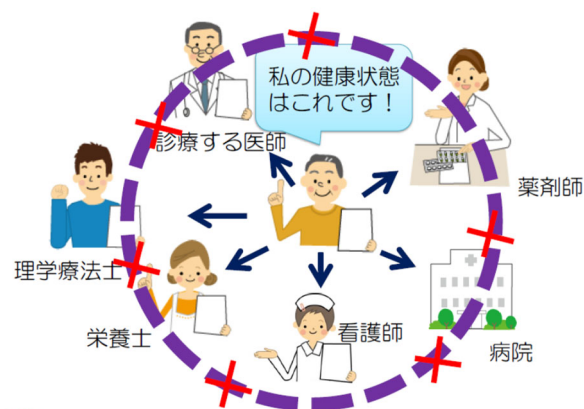


図2. 患者から事業者へ情報発信

参考文献

- 1) 厚生労働省 チーム医療の推進に関する検討会 報告書、平成 22 年 3 月 19 日
<https://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/03/dl/s0319-9a.pdf>
- 2) 日本看護協会 多職種連携と倫理、多職種連携と倫理 | 日本看護協会
<https://www.nurse.or.jp/nursing/practice/rinri/text/basic/problem/tashokushu.html>

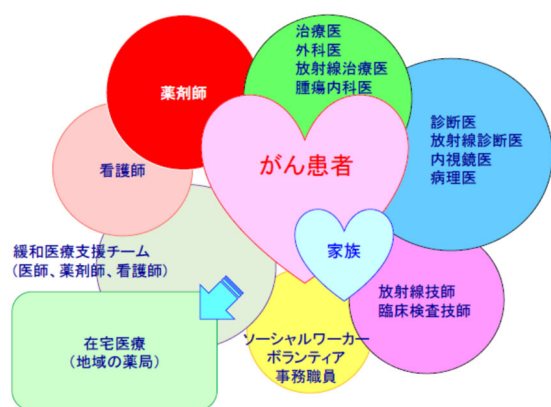


図1. チームによるがん医療の提供